

教師に意識される文章表現上の問題と短国学生の作文の性質について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1302

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



教師に意識される文章表現上の問題と 短国学生の作文の性質について

教師に意識される文章表現上の問題と短国学生の作文の性質について

中 尾 桂 子

あらまし：本研究は、大妻女子大学短期大学部国文学科学生の記述力と指導目標との関連を分析し、問題意識と記述状況を考察したものである。その目的は、今後の指導の方向性を探ることにある。調査では、まず、教師の問題意識が学生の記述の中のどのような観点と関連して印象付けられているかアンケートし、次いで、対応を急ぐ必要があると意識されている問題が、従来からの授業に組み込みやすい観点であるかを確認した。結果、学科の教員が期待する文章表現指導の内容と方向性、ならびに、学生に対する均一的な記述指導の範囲が確認された。

キーワード：意識調査 作文 相関分析 判別分析

1. はじめに

1.1. 学生の表現能力を巡る社会的な問題

08年度末からの景気の動向は、ここ数年の学生の進学や社会進出に著しく影響を与えている。景気の先行きが不透明ということで企業側の選別の意識が高まるとともに、よりの確な表現力のある学生が社会に求められるようになってきた結果、都心部の短期大学部でも、学生の就職率が低下してきている。

また、一方で、昨今、一般常識問題、面接、書類による選考基準が厳しくなったという声が、学生や担当者から聞かれることや、学生の表現能力の低下が指摘されている。

以上を考慮して、文系の短期大学部では、これまで以上に、社会での活躍に

直接結びつくための表現力を養成すべく、従来の教育や指導の内容の再検討が必要になっていると言えよう。

1.2. 大妻女子短国文科の取組み

都心部の短期大学部の1つである大妻女子大学短期大学部国文科では、従来、学生の思考力や表現能力を向上させる目的で、1年次生には「文章表現」、2年次生には「卒業研究」という必須科目が実施されており、ここ数年来、一定基準の基礎知識を習得させてきた実績がある。

しかし、短期大学に対する社会的な意味が変わりつつあることを受け、より的確な表現力のある学生を養成するためのノウハウやポイントを明らかにし、指導体制を確立しておきたい。

そのために、まず、実体を把握することが必要であることから、教員の意識や指導内容の見直し、学生の実際の記述や表現能力を調べ、基礎学力を向上させる方向性を検討する必要がある。これは、指導観点や評価の基準を明確にするための手がかりを得ることで、学生、指導教員、学科の3方向から捉えた実状と課題の概要を探ることが望ましいことによる。

1.3. 教員の意識調査と指導観点に関する調査の必要性

国文科必須の基礎科目は1年次の「文章表現」「文学・文化講義」と2年次の「卒業研究」の3科目で、これらの授業を通して研究調査の基本姿勢を学び、最終的に、400字原稿を30枚以上、すなわち、12,000字以上の卒業論文を書くことが2年次後期に課される。

「文学・文化講義」の授業は専任のクラス担当の授業で、「卒業研究」は専任のゼミ担当の教員が受け持ち、それぞれの専門に即した基礎知識と論文指導を行っている。3科目のうち、「文章表現」の指導は、このような専門的な論文指導の前の段階の授業として位置づけられており、専任、非常勤あわせて4人で学科の全1年次生約180人（平成21年時）に対応する。「文章表現」は、担当者が独自に「おそらく短大生に必要なだろう」と考えるシラバスを組んで指導に当たっている。

3科目は必須科目ではあるが、「文章表現」とそれ以外の担当者は基本的に両方別々の教員が担当しているため、文章表記上の基礎として位置づけられる指導内容と、実際の専門別論文指導の内容や指導方法、目的等が異なっている場合もある。また、相互の意見交換等の機会がないという体制上の問題がある。

そのため、1年次生の科目から、極力継続的に指導を積み上げていく体制を整えるという意味で、文章表現上の指導における各科目の有機的な結びつきの観点を探る必要性が、従来より指摘されてきた。

1.4. 実態調査の流れ—教員の意識と学生の問題—

「文章表現」担当者が学生全般に対して目標とする能力と、科目ごとの達成目標、さらに、学生の表現力の現状との関係を明確にしておくため、実態調査として、まず、教員が学科学生の記述上の問題や、それと関連して最低限必要だと考える指導内容に対する考え方を確認する。

その上で、次に、学生の問題として意識されている観点が何か、そのうちどれが最も教員に意識されているかを調べる。これら2つの印象調査の結果は、指導観点の優先順位を決めるための資料として位置づけることから、調査は記述式記名アンケートで「卒業論文」の指導を行う教師に対して行う。

また、学生の記述が均等なものであるのか、または、個人により差があるのかについて調べる。後に、教員の意識を調べた結果と、実際、学生の記述にみられる問題とを比較し、記述力や論理性的の評価ポイントを何に基づくべきか考察していくのではあるが、その前に、現状把握のため、指導のあり方を検討する基礎資料として、学生の記述に対する問題の捉え方や、その視点の方向性を確かめる。これは、ある年度の学生の記述における問題点を1つずつあげるだけでは指導体制全体を考えるためには詳細に過ぎることによる。

これら、学科教員の意識と学生の記述特徴との比較の結果から得られた考察に基づき、科目指導内容に関する草案作りや、科目担当者との指導内容のすりあわせを行う計画であるが、そのための各問題は、次の指導体制の調整方法を検討した段階で分析していくことから、本稿での報告観点は、学科教員の意識調査と学生の記述の性質が一定の線上で考えられるかどうかについてである。

なお、今回の調査対象は、全短国専任教員 8 人中 7 人と、非常勤講師 1 人を含む合計 8 人である。

2. 教員意識の概略

2.1. 表記能力に関連するものとして教員が意識すること

教員が学科学生の記述上の問題やそれと関連して最低限必要だと考える指導内容として、どのような観点に基準が置かれているか確認するために、学生に対する表現能力指導の必要性について質問したところ、8 人中 6 人が「たいへん必要」という意見で、1 人が「現状のまま」でよいとし、もう 1 人が「その他」、すなわち、「表記能力よりも内容に関する考察力や洞察力が強化されるべき」と答えている。これらからすると、必ずしも、基礎的な表記能力の指導に対して、全員が一致する見解というわけではなく、優先順位の付け方に違いがあることがわかる。

また、表記能力向上の目的はどこにあるかという問いには、図 1 に示すように、「就職活動の際の履歴書やエントリーシートにおける自己アピールの文章（就活）」と、「授業で提出するレポート（レポート）」を、それぞれ 7 人が選択しており、これらが、表現能力向上のための基礎科目（1 年次）で指導すべき内

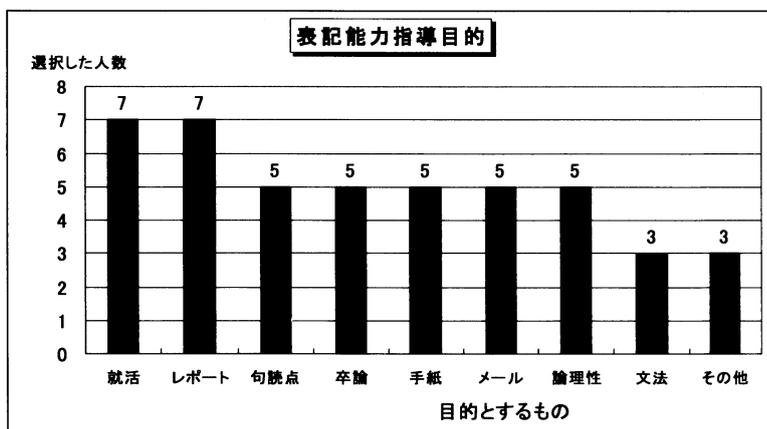


図 1 表記能力の指導を行う目的として教師が考えているもの

容だと考える教員が多いことを示している。「句読点」等表記規則や、手紙やメールの書き方、レポートや論文での決まりごと、ならびに、文章における論理性については、おおむね必要だと捉えられているが、学科教員全体で見ると、どちらかと言えば、基礎的な表記能力向上という目的がまずあり、それに付随するものから優先順位が高くなっているということのようである。また、文法的な問題は全員が必要だと考えているわけではない。学生の能力に対して「現状のままでよい」とする教員もいることからすると、意識の上では文法的な間違いはさほど多くないという認識であるのだろう。「その他」は、それぞれ1人が必要だと選択している項目であるが、「答案の書き方」、「欠席等各種届出の書き方」「段落の作り方」であった。

社会全体における不況という問題を念頭において教師の意識を見てみれば、就職活動と成績に関わるレポートとを重視する意図は納得できる。また、基礎的な表記知識と、特定の目的の為の書式に関する知識を、ほとんどの教員が必要だとしていることからすると、文章表現能力というものが、表記規則と目的別書式の区別に裏打ちされるものであると意識されていることが伺える。文法や答案、欠席届等の書き方は、問題点の重要度に対する教員の意見の違いを表しているとする、科目の指導目的に対する統一的理解を考えた場合、コンセンサスをとる際の注意点を示していると考えられる。

以上、文章表現能力という観点から、その目的を概観したが、学科として、表記能力が関係する上で重視する科目にはもう一つ「卒業論文」がある。卒業論文は、表記規則の遵守の程度が評価に関わり、また、思考の展開や論理性を指導する科目であることから、教員が何を意識してこの科目の指導を行っているかを次に見ておく必要がある。

卒業論文の指導では、題材に対して論理的な思考活動を行い、その結果を文章にまとめるという流れがある。そこで、内容、表記規則、環境調整等を踏まえて、次頁上にあげる20項目をたて、実際の指導上の範囲について質問してみたところ、半数以上の教員が卒業論文のために指導すべきだと考えている事柄は、多いものから順に次の項目であった。①論理性、②考える態度、③テーマの選び方、④調査の方法、⑤参考文献の探し方、⑥参考文献の整理方法、⑦調

〈卒業論文作成にあたって指導する内容だと考えられるもの〉

①論理性, ②考える態度, ③テーマの選び方, ④調査の方法, ⑤参考文献の探し方, ⑥参考文献の整理方法, ⑦調査結果の整理, ⑧章節構造等文章構成, ⑨意見と事実の書き分け, ⑩引用の使い方, ⑪インターネットからの引用(コピペの倫理感), ⑫資料の取り込み方, ⑬表現の使い方, ⑭主観的な表現(「私」「と思う」「みたいな感じ」「だ。)」の排除, ⑮話しことばと書きことばの区別, ⑯段落の作り方(段落開始1字開ける, 段落内の文章構成), ⑰句読点の使い方, ⑱助詞の正確な使い方, ⑲ねじれ文, ⑳ワープロ書式設定

表1 半数(4人/8人)以上の教師が選択した卒業論文指導に関わる事項

区分	指導事項	選択人数
技術・内容	④調査の方法	8
技術	⑤参考文献の探し方	8
内容	①論理性	7
内容	③テーマの選び方	7
技術	⑪インターネットからの引用(含, コピペの倫理感)	5
内容	②考える態度	4
技術	⑥参考文献の整理方法	4
技術	⑦調査結果の整理	4
表記規則・内容	⑧章節構造等文章構成	4
語用法	⑬表現の使い方	4
表記規則	⑯段落の作り方	4

査結果の整理, ⑧章節構造等文章構成である。このうち, 全員が必須だと考えていたのが, ④調査の方法と⑤参考文献の探し方である。表1に結果を示す。

指導すべきものとして捉えられている上記の事柄は, 近代文学, 古典, 歴史・文化, 文法が研究分野の国文科の特性に関連するものであるが, ⑪インターネットからの引用について, を特に指導しておく必要があると考えている教員が多いのは, 以下に触れる卒業論文指導時に感じた学生の問題点と関連があるのだろう。

選択人数が3人以下のものは次のものとなった。⑩引用の使い方, が3人で, 残りの⑨意見と事実の書き分け, ⑫資料の取り込み方, ⑭主観的な表現(「私」「と思う」「みたいな感じ」「だ。)」の排除, ⑮話しことばと書きことばの区別, ⑰句読点の使い方, ⑱助詞の正確な使い方, ⑲ねじれ文, ⑳ワープロ書式設定, といった事項は, 全て2人ずつ選択していた。なお, 以上の項目は, 論文作成のワークブックや教科書, 参考書であげられることが多い項目や観点であるが,

これら以外に必要なとして掲げるものは出されていない。

「卒業論文」に関するアンケートの結果は、いずれも、教師により、優先順位の違いが見られるものであったが、多くの教員が内容に関する事柄と、論文特有の技術の2項目を「卒業論文」の指導で不可欠なものと考えている。先の「文章表現」の授業科目に対する意識と比較すると、「文章表現」の指導よりも、「卒業論文」の指導には、より明確な指導項目があるということを表している。また、3人以下の選択となったものは論文のための指導事項以外の項目と重複するものであるが、これらは選択人数が少いことから、「卒論」よりは文章表現能力にまつわる基本的な指導項目として意識されていることが推察される。

一方、卒業論文の指導中に感じた学生の問題について、担当者8人に聞いてみると、語の使い方、書式、文章構成に問題があると4人の教師が感じており、次いで、剽窃が3人、慣用表現の使い方に対する問題を感じる教師が1人であった。このことと、国文科での「文章表現」科目と「卒業論文」科目が、それぞれ、1年次、2年次の履修と設定されていることとを関係させて考えれば、1年次から2年次にかけて指導されてきた内容のうち、2年間に定着しきれていないものとして、語用法、書式、構成の立て方に関する問題があり、それらについてより一層の改善を目指すべき注意が必要だと考えられていることになる。

以上から、表現能力を支える基本的な指導内容としては、適切な語の使い方、書式、引用、段落分けといった技術的な決まりごと、さらに、思考をまとめる構成力といった事柄が正確にできるようになることだと考えられていると言える。

2.2. 学生の問題点と全体印象との関係からみた重点・必須指導項目検討

文章表現能力の基本的な部分と、その中の論文に応用される能力とをどのように区別してとらえているかについて、2.1.の教師の意識調査から概略が確認できたが、再度、学生の表記に対する全体印象に、記述のどのような観点項目が大きく関係しているかについて相関分析で確認する。

2.2.1. 調査方法

学生の文章表現能力について総合的な印象を〈1.非常によくない 2.よくない

い 3. ややよくない 4. どちらでもない 5. ややよい 6. よい 7. 非常によい) の7段階で質問した結果に対し、学生の文章表現能力に影響する要素だと考えられる表2の各項目について、それぞれの印象を〈1. 非常によくない 2. よくない 3. ややよくない 4. どちらでもない 5. ややよい 6. よい 7. 非常によい) の7段階で質問した結果との関連性を調べることで、どのような指導内容に問題があると考えているのかを確認する。これは「卒業論文」の指導者のうち回答を得られた6人と「文章表現」担当者である非常勤講師1人の計7人の

表2 問題点印象評価の項目

区分		項目	
1	語彙力	1	語彙力 (使用語彙数)
		2	漢字の使用頻度
		3	使用漢字の正確度
2	語用	4	語の用法の適切性
		5	文の振れ (主述不一致)
3	文法	6	助詞の適切さ
		7	主題「は」と主格「が」の区別
		8	話し言葉と書き言葉の混在
4	文体	9	ですます体・普通体・である体の混在
		10	段落分け
5	表記規則	11	段落の一字下げ
		12	文の連ね方 (メールや詩のように1文1行等)
		13	句点
		14	読点
6	構成	15	文章構成
		16	結論のまとめ方
		17	意見の述べ方
		18	物事の説明のしかた
		19	話題展開の適切性
7	量	20	文章量の適切さ (指示通りの量が調節できるか等)
		21	話題の統一感
8	内容	22	内容の深さ
		23	談話 (述べ方) の簡潔性
		24	字の美しさ
9	文字	25	字の濃淡
		26	字の大きさ
10	その他		

アンケートによる観点の相関である。

2.2.2. 相関分析の結果

総合印象に、どのような観点や指導項目が影響している（または、影響していない）かを見るために、7人のアンケート結果を表3のように集計し（一部を抜粋）、表4のような相関行列の結果を得た。

26種類の項目のほとんどにおいて相関係数が0.7を超えて高くなるのは、文

表3 アンケート集計表の一部

	総合	語彙力	漢字 使用率	漢字 正確度	語用 適切性	文の振れ	助詞の 適切性
T1	5	2	4	4	3	4	5
T2	5	4	4	4	5	5	5
T3	5	2	5	5	4	4	4
T4	4	3	4	4	4	6	6
T5	2	1	2	3	3	2	4
T6	1	1	1	2	2	1	1
T7	4	3	3	3	3	2	3
平均	3.7	2.3	3.3	3.6	3.4	3.4	4

表4 相関分析の結果(一部)

	総合	語彙力 (使用語彙数)	漢字の 使用頻度	使用漢字 の正確度	語の用法 の適切性
総合	1				
語彙力(使用語彙数)	0.7072327	1			
漢字の使用頻度	0.9467293	0.589165	1		
使用漢字の正確度	0.8672274	0.438529	0.9722718	1	
語の用法の適切性	0.7302967	0.7893522	0.7601398	0.75	1
文の振れ(主述不一致)	0.7372098	0.6728738	0.8089737	0.7806538	0.8210324
助詞の適切さ	0.7001157	0.5503495	0.73951	0.7320775	0.7320775
主題「は」と主格「が」 の区別	0.3713053	0.3805212	0.5081143	0.5830006	0.7456984
話し言葉と書き言葉 の混在	0.2848069	0.6793662	0.3080939	0.3066112	0.823009
文体の混在	0.6087808	0.2249606	0.7526816	0.8720816	0.7438343
段落分け	0.6492374	0.6097498	0.6102572	0.5513828	0.6233023
段落の一字下げ	0.5139966	0.6654176	0.5364768	0.5153385	0.7873227
文の連ね方	0.7969851	0.5742889	0.7937254	0.7483315	0.65479

章記述において、いずれもそれなりに重要なものとしてあげられている指導観点ばかりであることから当然だと考えると、どちらかといえば、それでも相関係数の低いものが逆に意味があると考えられる。

相関の低いものは、主語の「は」と「が」の混用といった文法上の問題、話しことばと書きことばといった文体上の問題、段落の一字下げといった表記規則の問題と、話題転換の適切性といった文章構成上の流れ、さらに、字の美しさという表記上の問題であり、それらは、それぞれ、0.37, 0.26, 0.51, 0.47, -0.04である。なお、0.5は、通常は緩やかな相関関係があると判断できる数値であるが、今回はサンプル数が少ないため、本稿では相関があまりないと見る。

項目全体ではわかりにくいいため、語彙や文法といった問題観点上につけた区分で相関分析を行った(表5)。学生の問題点として、教師の意識に上っているのは、語彙力、語用、表記規則、構成、量、文字ということで、文法、文体、内容についてはあまり問題視されていないという結果になった。

先の2.1の印象評価の結果で重要視されていた語彙力、構成、表記規則という観点が、こちらでも確かに意識されていることがわかる。こちらの結果からも、語彙数や漢字の使用数といった語彙の使用数の問題、文章の組み立て方である構成、句読点や段落分けといった表記規則における配慮に問題があると考えられていることが推察できる。また、内容や文体に対しては、0.50~0.68であることから、こちらの結果では割と副次的に受け取られているように見える。

表5 区分での相関分析結果

	総合	語彙力	語用	文法	文体	表記規則	構成	量	内容	文字
総合	1									
語彙力	0.96	1								
語用	0.73	0.86	1							
文法	0.64	0.76	0.81	1						
文体	0.55	0.70	0.91	0.87	1					
表記規則	0.83	0.83	0.71	0.81	0.60	1				
構成	0.81	0.77	0.55	0.71	0.53	0.90	1			
量	0.72	0.78	0.74	0.88	0.83	0.83	0.90	1		
内容	0.68	0.59	0.46	0.72	0.47	0.86	0.81	0.74	1	
文字	0.76	0.75	0.66	0.67	0.70	0.51	0.57	0.69	0.61	1

2.2.3. 各項目への印象と総合印象の関係

7段階評価は、言い換えれば、満足度のようなものである。そこで、ホテルなど接客における満足度アンケートの分析の際によく用いられる手法を用い、総合印象に対する各問題点毎の相関係数と、各問題点ごとの評価の平均をもとに、表6のようにまとめ、図2のような散布図をつくって視覚的にその位置付けを確認する。

表6 区分で見た満足度

	総合印象	評価平均
語彙力	0.955018	3.047619
語用	0.730297	3.428571
文法	0.636249	3.714286
文体	0.545691	3.071429
表記規則	0.825405	3.314286
構成	0.807294	3.171429
量	0.718049	3.285714
内容	0.680883	3.476143
文字	0.760726	3.714286

図2の縦軸は、各項目満足度の平均で、上に行くほど、満足度が高いことを表す。図2の横軸は総合印象と各項目との関係の強弱を表す相関係数で、右へ行くほど、関係が高いことを表す。単純に領域をそれぞれの中点で4区分に分割して捉えれば、総合印象に対して関係のあるそれぞれの項目のうち、

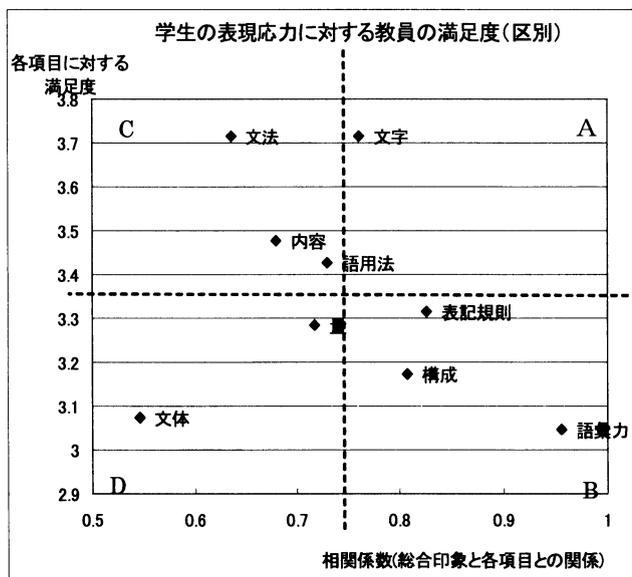


図2 総合印象に対する相関関係と各科目評価平均の散布図

いずれを重要視しているか視覚的に判断しやすい。そのため図2のA, B, C, Dの4つのうちのどのエリアに位置するかで満足度と相関係数の高低を判断する。

図2のAのエリアは、満足度が高く、相関の高いものとなり、そこに見られる項目は、現状維持でよいという認識となる。Bのエリアは満足度が低く、相関が高いものとなるため、総合印象に影響しやすいものであることから、Aとは逆に早急に改善すべき課題項目ということになる。また、Cは満足度が高く、相関が低いものであることから、教師の意識にはあまり影響していないものだと考え、Dは、満足度も関係も低いことから、意識の外に置かれているものということになる。

改めて、図2を見ると、先に、文体や文法に関して、相関係数が低いという結果が出ていたことが視覚的にも確認される。ただし、文体は、あまり意識されていないという意味で相関が低く、文法は、現状で満足ということ意識されておらず、その意識の違いが明確になっている。文字は、どちらかといえば、意識されがちではあるが、しかし、現状で満足であること、また、無意識に、表記上の文字の美しさが評価や印象に影響している可能性が伺える。内容が少々よくなくても、字がきれいであれば、評価が高くなっている可能性が否めない。図2に示すように視覚的に見ることでその捉え方の微妙な差が分かりやすい。

また、現状維持で満足だというAと、意識の外にあるDのA, B両ゾーンに入

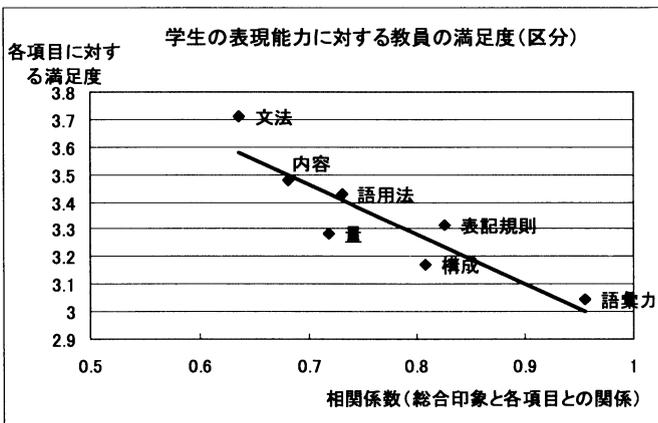


図3 総合印象に対する相関関係と各科目評価平均の散布図 (一部削除)

るものを除外して散布図を作り直したのが図3の散布図である。図3で全体を見ると、総合印象と各項目に対する評価、すなわち、満足度が負の関係にあり、語彙力、構成、表記規則といった不満を感じている項目がより明確になる。「(文章)量」については教師により差があるものの、量、語用法、内容についても現状には満足ではあるが、評価に対する影響が大きいことが伺える。相関係数が中程度の数値であった内容に対する意識のあり方がここで明確になっている。

以上からみると、総合印象に対して、語彙力(語彙数、漢字数)と文章構成(論理的な思考の組み立て方)、表記規則(句読点、段落分け)を重点的に指導することで、より学生の表記能力に対する教師の評価が変わると予測できる。このことから、指導項目の見直しについては、まず、この3項目の指導内容に着目して行うとよいということになるだろう。

3. 語彙、構成、表記規則から見た学生の作文

2章では教師の印象評価から語彙、構成、表記規則について指導体制を考えるのがよさそうであるとわかったが、その指導は、学生全体に一律に行うべきか、それとも、個別に行う体制を考えるべきかを判断する必要がある。そこで、平成21年度入学の1年生30人と、平成20年度入学の2年生の作文30人、計60人分の意見文をサンプルとして、記述の均一性について調べる。

日本語のテキストは、電子化した後、学生別にファイルにし、テキストマイニングシステム KH Coder を利用して単語単位に分類する。品詞分類、ならびに、その形態素処理にまつわる全ての結果は助詞、助動詞分析機能を追加した KH Coder のデフォルトの出力によるものである。

内容語としては、今回、使用上の特徴的な差が見られやすいと考えられる名詞、動詞、副詞、接続詞の異なり語数を分析に利用するが、KH Coder の出力では、名詞は「サ変名詞、名詞 B、名詞 C、副詞可能」という区別がなされる。同じく動詞や副詞にも、それぞれ「動詞、B」、「副詞、B」となる。語数として利用する場合は、各々の下位分類を合算した数を利用する。ただし、名

詞に分類される「副詞可能」は、作文のテーマと関連して機能的に副詞として利用されるものが多かったことから、今回は副詞としてカウントしている。

3.1. 学生の記述の均一性について

従来より「文章表現」担当の指導者から、印象として、学生の記述能力に差が大きいことが指摘されていた。ただし能力差というものがあるとしても、その問題が一律に捉えられる性質のものであれば、指導体制や指導ポイントを明確にすることで対応はしやすい。それには、もちろん、質的に詳細な分析が必要ではあるが、まずは、記述が一定の性質を持つものかどうかについてみるために、特に、前節で見た教師の問題意識に関わる観点を指標にして、学生の作文に対して判別分析を行い、学年により順当に学習が進められているのか、または、学年に関係なく、その差が大きく現れているのかを確かめる。判別分析は、文体上の特徴を示す指標に基づき、個々の学生が所属するであろうと考えられる仮想的なグループ別に判別する統計分析の1つであるが、これを用いるのは、分類基準をこちらが特定せずとも自動的に分けられることから、想定外であるか否かに関わらず、峻別が可能であることによる。

本稿では、平成21年度時点で在籍の1年次生（平成21年度入学）と2年次生（平成20年度入学）の学生がそれぞれの学年末に書いた、大学生のアルバイトの是非について意見を述べる作文を各30人分ずつ利用する。作文は原稿用紙1枚程度の意見文で、意見文の書き方はどちらの学年も既習の時点で書いたものである。

判別のための指標として、今回は、語彙力に関する情報として Type, TTR (Type Token Ratio) と、名詞、動詞、副詞の他に、構成にも関係する接続詞をあげる。また、構成に関する情報として段落数と文総数、さらに、表記規則の問題に差があるとされることから、句読点の使用数を利用する。杉浦他 (2007) などの先行研究では、その目的とテキストが英語であることから、判別分析の指標にテーマとの関連性が高いとして平均単語帳や内容語比率があげられているが、本節の分析対象は日本語テキストであり、また、内容までは見ないため、概要のみの指標として、Type, TTR, 名詞、動詞、副詞、接続詞、段

落数、文総数の8つと、表記に関する句読点をあげ、合計10項目とする。

データは、各学生の作文を1テキストとして、その中のType、TTR、段落数、文総数、名詞、動詞、副詞、接続詞の異なり語数、句点、読点の実数を用いるが、TTRのみ百分率(%)である。これに、1年生と2年生の区分類として1、2の分類番号を与え、フリーの統計マクロであるSeagull Statの判別分析マクロを利用するのに適した形式にデータを整理した後、線形判別法により解析する。線形判別は各テキストが2群間のどちらに所属するかを推定する手法であるが、今回のデータでは、指導効果により1年次と2年次に分かれていると期待される。指導担当者から指摘されるように、能力差が大きいのであれば、1、2年次に関係なく、かなりの割合で2群が混ざっていると考えられることから、一律に指導していただくだけでよいかどうか明確になりやすいと考え、本方法で行うことにした。

3.2. 判別分析の結果から

相関行列では相関のとりたてて高いものがなかったことから、表7にあげる判別関数係数を見たが、特に大きく判別得点に寄与していそうなものは見当たらない。接続詞が0.449となっていることからすると、緩やかに、係数得点に寄与しているようであるが、群間の分離の程度を評価するマハラノビス D^2 は1.26と小さい。また、誤判別率が0.26であることから、判別精度は74%程度となるが、分析可能だと考える。

判別結果は表8に示す。ここでは取り上げないが、判別得点表では1、2年次をちょうど分割するように中央線が引かれ、それぞれの群、すなわち、1年次群に7つ、2年次群にも7つ、群外データである誤判別データが混入している。

通常、これほど均一に分かれないことからすると、1年次群と2年次群は割と明示的に分かれていると言える。それぞれに30人中7人分の作文が質の異なるものとして判定されているが、群間の距離は小さく、それ程大きな差があるわけでもないことからすると、群として1、2年の差があり、そして、それぞれに2種類のタイプの学生が割と近くまとまって存在すると考えられる。

1、2年次のそれぞれの群の中で性質の異なる2種類の学生が存在すること

表7 判別関数係数
1群～2群線形判別関数の係数

変数	1群-2群
異なり語	0.167882
TTR	-0.03978
段落数	0.047956
名(名, サ, B, C)	-0.17076
動詞(動, B)	-0.46296
副詞(副, 可, B)	-0.34602
接続詞	0.449785
句点	-0.23952
読点	-0.05448
定数項	3.847675
マハラノビスD ²	1.264926
誤判別率	0.286941

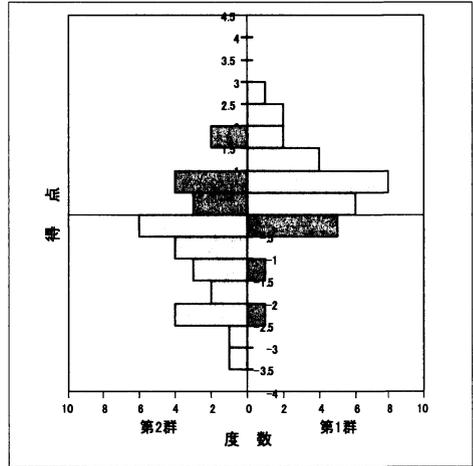


図4 線形判別関数による得点度数分布図

表8 判別結果

1群-2群		1群	2群	正判別率
前	後			
1群		23	7	76.7%
2群		9	21	70.0%
総合				73.3%

がわかったが、それら性質の異なる作文が、実際にどのような記述であるか実際の作文を見てみると、2年次群では、語彙のバリエーションが多めで、段落分けが明確であり、さらに、句読点が正確であることから、論旨が明確で読みやすく、印象としてよく書けていると判断できるものが判別されていた。

一方、1年次群の方で異質とされたものは、内容はごく普通のものだが、書式上記述規則がきっちり守られており、また、語彙のバリエーションが多目だが、語や表記等に特徴的なものが判別上の「異質な作文」として出されている。

以上からすると、語彙力と段落分けにおいて得点の高いものが判別分析における「異なるグループ」として検出されているということになる。

16

そうすると、1, 2年次群どちらの場合でも、大多数がそれほどよいものではなく、その中に、約3分の1程度は、よく出来ている作文が含まれているということになるだろうが、ただし、1年次のグループは良いというよりは、

語彙の多さという観点からだけの判別でもある。とすると、作文の質自体は割と均一的だと考えられ、1年次群から取り分けられた作文は、良いというよりは、内容や語用法上で個性的なグループだと考えられるのではないか。

1年次が個性的なものかそうでないもので、2年次がよく書けているものかそうでないものだと考えられることから、学年の区別は表記能力にもあると考えられる。より詳細な分析がさらに必要であるが、おおむね、学年通りに学習が進んできていると期待できることになる。しかし、よくできる学生が中に含まれており、表記や問題点として全体を考えるには、均一的ではないことに対する配慮も必要だということである。

4. 考察

本稿では、大妻女子大学短期大学部国文学士の記述力と指導目標との関連から今後の指導の方向性を探るための概略調査として、まず手始めに、教師の問題意識を探り、学生の作文の均一性について判別評価を行った。

教師の印象調査の結果、語彙、構成、表記規則に対する意識が高いことが分かったため、さらに、想定される詳細な問題点を洗い出すために重ねて問題観点のアンケートを行った。結果から、語彙数、漢字数、論理的な構成作り、句読点や段落分けといったごく基本的な表記規則に対しての指導を求めていることが分かった。

しかし、教師により優先順位の高い指導項目が異なることから、全体の指導基準を決め、評価の観点の最低ラインを探ることを目的とした場合、まだ、不明瞭な部分が多く、実際に何をどの程度の問題としてとらえ、評価の際にどのように参照していくかについては、具体的な学生の表記上の問題を見ながらのアンケートを行うべきだと考えられた。

次いで、学生の記述が均一的なものかどうかを調べるために、教師が問題だと感じる観点に基づいて指標を決め、判別分析を行ったところ、学年別にはっきりとグループ分けされた。しかし、各群の差はそれ程大きいわけでもない。

また、各群それぞれにおいて、さらに区別されるグループがあり、それらが、

「その他大勢よりは良い」、または、「語彙力と書式といった一部において良い」記述であると考えられるものであった。

このことから、学生の1年次、2年次という学年に応じた記述がある程度はあるものの、その表記の性質には、一律に捉えきれない良し悪しの区別があることから、記述均一性があるとは断定しきれず、また、それは、学年においても異なることがわかった。

以上、今回の調査で明らかになった課題をまとめると、大きく2点となる。まず、判別分析での指標に関してである。今回指標としたものは、先の教師の意識調査や、問題箇所に対する教師の印象ともつながる観点である。記述における問題と関連がありそうなものとして指標に選んだのだが、その問題のあり方が、学生によって異なることがわかった。ただし、関連性があると予測できたが詳細は分類できていない。したがって、さらに指標を詳しく検討し、いくつかの観点から再検証する必要がある。

課題の2点目は、試用した記述文章に関してである。記述能力の差は、外国語学習の観点からではテーマによる影響は無いとする指摘もあるが(杉浦他, 2007)、文章の記述型が異なると、評価や記述に影響を与えるような差が見られることも考えられる(村上, 2005)。このため、コーパスを用いて調査するためには、学生の記述のバリエーションを集め、多角的に検証していく必要がある。

調査における今後の課題としては、学生の記述データベースを作成し、学生の入学時の入試区分や、卒業後の進路との関係を考えながら経年変化を追跡できるように調査環境を整備するのもよいと考える。そのためには、質的な観点からの詳細な分析とコーパスを用いた調査との二方向から調査手法の検証を繰り返し、望ましい手法を考えておきたい。今後の課題である。

5. まとめ

- 18 本稿では、大妻女子大学短期大学部国文学部学生の記述力と指導目標との関連を分析し、今後の指導の方向性を探るための概略調査として、目標や問題意識と作文の関係を考察した。

教師が学生の記述に感じる問題点は、語彙、表記規則、構成に関する観点に多く、それらに対する指導的対応を急ぐ必要があると感じていることが明らかになった。

また、同時に、専門ゼミにて行われる論文指導と「文章表現」という記述指導は別のもので考え、「文章表現」を基礎、論文指導を応用と位置づけ、文章記述の基本的な約束事を「文章表現」という科目で指導してもらいたいという意向が見られた。

次いで、意識されている問題への対応が従来の授業に組み込みやすい観点であるかを確認する目的で、大学生の記述の全体的な取り扱いが可能か調べるため、語彙、表記規則、構成に関する項目を指標に、記述物の均一性を判別分析により判断した。

結果、今回調査対象とした学生の記述には、全体としてそれほど大きな差がないとはしながらも、2年生には能力差がありそうであること、1年生は、能力差とは言えないものの個性の差があることがわかった。

また、差があるとされた作文を質的に目視で見たところ、一部に良い点が見られるが、一部は問題が残るなど、一定の特徴を持つような問題を含むわけではなく、個人によって異なる得手不得手の箇所に差がある程度であった。

以上から、今後の調査、分析の方向性として、学生の記述上の問題を整理することだと考えられた。

ただし、今回の印象評価の観点は、「よく検討される事項」ということで、厳密な意図があって選別した観点ではない。他にもより重要な課題がないかについてもさらに検討する必要がある。

本研究は、平成21年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究018番「大学基礎教育としての文章表現能力指導の可能性と課題」のための基礎調査をまとめ、統計数理研究所の2009年度の合同発表会で発表した内容に基づいて加筆修正したものである。

参考文献

- 杉浦正利, 坂上辰也, 成田真澄 (2007. 4. 28) 「英語コーパスにおける作文テーマの影響 : 英語母語話者コーパスとの比較分析」英語コーパス学会第29回大会 (於 同志社大学).
- 小林雄一郎 (2009) 「コーパス言語学研究における判別分析の応用」『コーパス言語研究における量的データ処理のための統計手法の概観』統計数理研究所共同研究リポート No. 232, pp. 39-52.
- 村上京子 「作文評価における文の種類の影響—意見文と説明文の比較—」『日本 留学試験における記述問題の実施方法と分析観点に関する実証的研究—記述問題の問題形式・量及び評価基準の適正さについて—』2003・2004年度文部科学省科学研究費補助金萌芽研究15652032 (研究代表者: 村上京子) 研究成果報告書.
- 内田治, 菅民郎, 高橋信 (2003) 『文系にもよくわかる多変量解析』東京都初株式会社. KHCoder : <http://khc.sourceforge.net/>
- Seagull Stat: <http://www.jomon.ne.jp/~hayakari/index.html>